| 開催地名：沖縄県読谷村 | |
|---|---|
| 開催日時 | 令和 3 年 11 月 4 日（木）　19:30～21:00 |
| 開催場所 | 読谷村文化センター中ホール |
| 語り部 | 草貴子　　（宮城県仙台市） |
| 参加者 | 自主防災組織、自治会、赤十字奉仕団、民生委員児童委員、<br>消防団、福祉施設等　100 人 |
| 開催経緯 | 本村は内陸部地域において自主防災組織の結成が課題となっている。結成に向けて、内陸部の後方支援の役割について学び、自主防災会の必要性について認識していく必要がある。<br>近年大きな災害が起こっていないため、住民の災害に対する危機意識を高める必要があり、既存組織の育成強化が求められている。 |
| 内容 | （1）震災時の宮城県仙台市泉区について<br>私が住んでいるのは、仙台市泉区。泉区東部に位置する市名坂東町では、平成 20 年に女性が中心となって町内会を設立した。特に防災に力を入れており、平成 22 年に完成した集会所は、災害時に避難場所として機能する施設を意識して設計された。復旧の早さを考えたオール電化、・障がい者用含め 2 か所のトイレを設置、必需品一式の備蓄など、災害時でも普段通りの生活を送れる準備を行っていた。<br><br>（2）当日の状況と避難生活について<br>震災当日、私は小学校の卒業式に出席していた。その後、家電量販店での買い物中に被災。立っていられないほどの強い揺れが襲い、店内はガラスの割れる音や悲鳴が響いていた。外では周囲の電柱が倒れそうになり、車が上下に大きく動いている恐ろしい光景が広がっていた。泉区は内陸のため、幸いなことに津波被害はなかった。<br>集会所には女性や子供など 100 名が避難。町民でない方も受け入れた。その後、避難者の中からリーダー・サブリーダーを決め、町内会は補佐に回る体制を整えた。避難生活中は毎日温かいコーヒーを淹れ、全員と会話で交流を図った。電気は 2～3 日、水道は 3～4 日、ガスは 1 か月程度で復旧した。子供たちは私が区役所で得た給水車などの情報を瓦版にし、町内へ広報。高校生は子供たちの勉強サポートや、子守を担当。各自が率先して協力しながら避難所解散までの日々を過ごしたが、避難生活は誰もが初めての経験だったため思わぬトラブルも多く、想定不足を強く感じた。 |

| | |
|---|---|
| | （3）東日本大震災から得た教訓と新たな取り組み<br>防災のためには規則・訓練・備蓄が大事だし、想定外を考えるのも重要だ。だが、決まりや子供・男女などの属性にとらわれず、個々人が「私の役目」という想いを持って行動することが大事であると強く感じた。「1000 年に 1 度」と呼ばれる大震災の中、それぞれが自分の役割を懸命に果たしていたことで、厳しい現実を乗り越えることができたからだ。<br>避難所の解散後、私は「町内会に所属していない方」を災害から守る対策を始めた。加入は任意とはいえ、町内会に入っていない人が被災時に支援を受けられない事態があってはならない。主に行ったのは、マンション住まいで未就学児がいる若い家族を中心とした育児支援と、おもちゃ図書館(ずんだっこ)の開設。これらの活動が功を奏し、町内会への入会者は増加した。<br><br>（4）今後、私が取組を強化したいこと<br>いつ災害が来るかはわからない。だからこそ、いかなる時も仲間と自分を信じ、地域と歩んでいけるよう備えることは重要だ。私は自身の役目を考え、平成 25 年に地域の組織団体と「避難所運営委員会」を作った。現在、初代事務局長として邁進している。防災活動の充実と地域への理解を広めるため、今後もこの取組を強化していきたいと思っている。<br><br> |
| 開催地より | ・自主防災会の設立支援、既存の自主防災会の強化<br>・参加者からは、東日本大震災の被災地での現実が伝わった。良いところも悪いところも含めて本音で伝えてくれたところがよかった。という声が寄せられた。 |